

愛読諸嬢の文学的欲望

——『女子文壇』という教室——

飯 田 祐 子

明治四〇年代、「文学」は自然主義運動の中で構造的に男性ジェンダー化する。そのとき女性たちはどのように「文学」に関わっていたのだろうか。本論では、当時唯一の女子向け文学雑誌として出発し発展した『女子文壇』（明治三八年一月創刊）をとりあげ、「文学」の名のもとに集まった、無名の女性たちに焦点をあてた。明らかになったのは、集まった女性の欲望に、二つの種類があったということである。一つは、「交換」という手段により形成されていった読者間交流に対する欲望であり、文学そのものとは無関係なものである。中心となった「誌友倶楽部」という投書欄は、全くの初心者、あるいは、成長を特に望まない読者の集う場所であり、途切れることなく、次々と新しい読者を吸い寄せ続けた。一方で、四巻あたりから、新しさや上昇を志向するもう一つの欲望、文学に対する欲望が、形をとりだす。読者の中に一段上級の特別な存在が登場し、投稿文章への批評が寄稿されるようになる。特別な存在の出現は、読者の中に階層をつくり、成長や上昇への欲望を生む装置となった。この傾向は持続的に強まっており、〈覚めたる女〉の集う先鋭的な雑誌であることが特色となるに至っている。ここで重要なのは、二種類の欲望が統一されぬまま、存在し続けたということである。一つ目の欲望によりつくられた階層は、基層としてそのまま維持されつづけている。つまり起こっているのは、投稿者の層の分化であって、全体的な文学への昇華ではない。しかも後者の場合も中心に

なったのは「散文」欄であった。それは、〈告白〉という明治四〇年代的要素に素人性を重ね得る、その意味で女性化が可能なジャンルであった。全体として指摘できるのは、文学と女性という概念が、容易に折り合わなかったということである。が、同時に重要なのは、これが文学をめぐる発生した事態だということである。『女子文壇』の愛読諸嬢が抱えた欲望は、「文学」の機能について、文学的価値とは異なる観点から考える必要性を浮かび上がらせる。

附記：上記は1998年度神戸女学院大学女性学インスティテュート研究助成による研究成果として『日本文学』47-11（日本文学協会、1998.11）に掲載された論文の要旨である。

夫婦ゲンカの社会史

—琉球の慣習法と裁判をめぐる—考察—

真 栄 平 房 昭

「結婚もマカロニも、うまいのは熱いうちだけ」と、イタリアのことわざにもあるように、どんなに仲の良い夫婦^{カップル}でも熱愛が冷めると、それぞれの意見の対立から夫婦ゲンカが起こるのは、ごく自然のなりゆきであろう。やがて二人は仲直りし、またケンカを続けながら人生の年輪を重ねていく。

フランスのアナール派の歴史家で知られる G・デュビィと M・ペローは共編著『「女の歴史」への誘い』（藤原書店、1994）において、「この歴史は、女性たちの歴史よりも、両性の関係の歴史であろうとしている。この関係こそが、おそらく問題の核心であり、女性を、他者としてまた自己として、規定するものなのだ」と述べた上で、「時の流れのなかで、この両性間の関係の本性とはどのようなものだったのか？ 表象作用、知、権力、日常の行いなどのあらゆるレヴェルで、この関係はどのように機能し、変化してきたのか？」と鋭く問いかけている（同書34ページ）。

このような男と女の関係について、本論では〈社会史〉の文脈から歴史的に検証する視点に立ち、〈日常性の鏡〉に映し出された夫婦ゲンカをめぐる庶民生活の一断面を探るため、19世紀の琉球社会における事例的分析を試みた。主な分析対象や方法として、絵画史料「八重山蔵元絵師画稿集」の図像解釈、伝統的共同体における夫婦ゲンカの紛争調停や慣習法のあり方などをふまえ、琉球王国の裁判記録を分析し、ある夫婦ゲンカの発生から紛争事案の審理、判決にいたる具体的な経緯を明らかにした。

附記：本稿は1998年度神戸女学院大学女性学インスティテュート研究助成による研究成果として『沖縄県女性史研究』第2号（沖縄県教育委員会、1998.9）に掲載された論文の要旨である。



夫婦ゲンカの図（「八重山蔵元絵師画稿集」より）

男らしさ・女らしさへの歩み

森 永 康 子

本稿は共著「ジェンダーの心理学」(ミネルヴァ書房)の第4章として執筆したものである。この書は、ジェンダーについて、「ステレオタイプ」をキーワードに心理学の立場から説いたものである。

本稿は、子どもがどのようにして女らしさ、男らしさを身につけるか、つまりジェンダー化の過程と、さらにそれがもたらす影響について説明した。ジェンダー化の過程を説明する理論はいくつかあるが、ここでは2つの立場について解説した。一つは周りからの働きかけによってジェンダー化が進むという社会的学習理論のアプローチである。もう一つは、子ども自身が自ら積極的に男と女というカテゴリーを用いて世の中を理解しようとするために、ジェンダー化が進むという認知発達のアプローチである。前者の例としては、ベビーXの実験例に代表されるような親や周りからのしつけ、学校現場における隠れたカリキュラム、絵本や童話またアニメに描かれた男女の姿、さらに、仲間関係などが、子どもに影響を与えるものとして考えられる。認知発達のアプローチでは、子どものジェンダー化は、知的側面での発達とともに進み、ジェンダー・ステレオタイプが生まれ強固になるのは子どもの知的発達の1つの側面であると見なす。なお、第5章「ジェンダー・ステレオタイプにあやつられて」では、人は、他者の存在によってジェンダー・ステレオタイプに沿ったように行動してしまうために、ジェンダー・ステレオタイプは存在するという考え方についても紹介している。

ジェンダー化によって、子どもたちはジェンダー・ステレオタイプを身につ

ける。しかしながら、思春期には女らしさ・男らしさと自分らしさとの葛藤が見られるようになる。特に女子の場合、女らしさは社会的にもそれほど望ましいものでなく、また自分自身も価値をおいてないにも関わらず、女性としては望まれるという葛藤が見られ、これが女性の自尊心を低めている原因とも考えられるのである。

以上のような点について、本稿では内外の文献を網羅し解説を行った。

附記：上記は1998年度神戸女学院大学女性学インスティテュート研究助成による研究成果として「ジェンダーの心理学」（ミネルヴァ書房、1999）に執筆した章の要旨である。